

## 絶対他力教の本質

「弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことに  
おわしまさば、善導の御釈虚言したもうべからず。善導の御釈まことならば、法然  
のおおせそらごとならんや。法然のおおせまことならば、親鸞がもうすむね、また  
もつてむなしかるべからずさうろうか。」

## 自証

親鸞聖人はすでに、絶対他力の信を告白して、往生はただ念仏一つによつて成就さ  
れることを信ずる外、別の子細なきを断言し、善知識、法然上人にすかされたてまつ  
りて念仏して地獄におちたりともさらに後悔のなきことを宣言して、ついに「いづれ  
の行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と、大地に生きる者  
の偽らざる相を大胆につきとめて、愚禿の真面目を發揮せられました。

仏を求めて得ず、法を求めて得ず、泣く／＼吉水の禅房を訪ね、ここにはからずも  
恵まれたのは僧であった。求められた一切がここにあった。聖人は救済の確証を法  
然上人の上に見られたのでありました。見よ！ここに、愚痴にかえつて念仏に生き  
きり、全身全霊安らかに、明るく、安住微笑したもう人がおわすではないか。

今や聖人は師の上に法を見られたのである。仏を拜せられたのである。仏、法、僧  
の三宝を人の上に全うじて、絶対他力の救済を確立されたる法然上人の前に、無条件  
にすべてをなげ出して、そのみ教に帰し、念仏道をたちどころに獲得せられて「たと  
ひ法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべか  
らずさふらふ。」と、徹底せる絶対帰依僧の天地に、新たな生命道を見出されたので  
ありました。

これ実に、人間の相対的思惟の野に於いて見出される、単なる智識にあらず、あら  
ゆる論理を超えたる体験の確証であり、人間の功利的分別の世界を超えて、大悲に安  
住する者の、絶対自由開放の宗教的極致の風光である。

「たとひ諸門こそぞりて、念仏はかひなき人のためなり。その宗あさし、いやしとい  
うとも、さらにあらそはずして、われらがごとく下根の凡夫、一文不通のもの、信  
ずればたすかるよしうけたまはりて、信じさふらへば、さらに上根のひとのために  
はいやしくとも、われらがためには最上の法にてまします。」

地獄一定は愚禿の真価、この見出されたる我に相応する法こそ、実に「我らがため  
には最上の法」である。「浅きは深きなり」ただ師のおおせを聞いて信ずる外に、さら  
に私のものとは一毛だにない。「愚禿すゝむる所、更に私なし」「弘経の居士宗師等、  
無辺の極濁悪を救済したまふ。道俗時衆共に同心に、唯この高僧の説を信すべし。」  
教法の前に絶対謙虚なるは実に愚禿の真面目である。

我らは今や、大地に合掌して師教の前に無条件にひれ伏したもう聖人を見ました。  
ああ、されど絶対他力教とは畢竟人間中心の教えではないのか。英雄崇拜の変形か、  
善知識だのみの執着ではないのか。

ここにおいて、我らは「……………いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」と拝読した我らが眼を一転する時、たちまちにして、そこに天空皎々たる明月を仰ぐが如く、聖人の信境に輝きわたる、唯一最高絶対なる、如来の本願の提示に驚くと共に、聖人の信の本質は何であつたかを知るのであります。

「弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず……………」

見よ。聖人の信は、人なる善知識の上にとゞまつたのではない。単なる法の上にあつたのではない。仏をはなれて、何の法ぞ、何の僧ぞ、今や、地上一切を超えて、一切群生の畢竟依たるべき、常住不変、金剛不壞の如来の本願は、何らの前提なくして、ここに忽然として掲げられた。

「弥陀の本願まことにおはしまさば……………」人を超えて、如来の本願を掲げられました。まことにそこには地上一切の証明もなければ、煩わしい説明もない。弥陀の本願はこれ、それ自体自明の絶対真理である。これなくしては人格生活を考えることの出来ない所の「疑を除き証を獲しむる真理」であり、「悪を転じて徳を成す正智」であつた。よろずのことみなもて、そらごとたはごとまことあることなき世界に、ただ一つのまことは如来であり念仏であつた。如来は常住であり、不変である。眞実であり、絶対である。金剛であり、畢竟依である。今や聖人の信心は、如来本願の「まこと」によつて成就することを示されたのであります。

まことに聖人の新たなる天地は、絶対的帰依僧より開いて、やがて帰依法に入り、帰依仏に及んだのであつた。仏教においては常に、仏、法、僧と三つの門を開いては2あるが、仏を求めて、大聖を去ること二千余年になることを悲泣し、つぎに法を求めてついに失敗し、最後に、僧たる人を入口として、法、仏の天地に入りたまひしことは、まことに道を求むるものにとつて注意しなくてはならない求道上の実際問題である。まず仏を見、法をきわめて、証に到られたのではなくて、人格即ち僧よりやがて他力本願の信境に徹底せられたのであつた。

だが、聖人は今や、堂々と、僧たる人を超えて、帰依仏の世界を示されたのであつた。聖人の世界は一転した。聖人の信仰は、人格中心の人間教ではなかつた。善知識だのみの執着ではなかつた。その最後の帰依の対象は「帰命無量寿如来、南無不可思議光」尽十方無碍光如来に外ならない。単なる帰依僧にあらず、単なる帰依法にあらず、如何なる教法も、それが徹底的大安心を感得せしめない以上、我にとつて何の価値があろう。今や聖人は、確かに師の上に確証されたる本願の名号を、やがて我が上に獲得して、完全に、我が上に救済を自証せられたのであります。すなわち我らの機如何によつて現われたもう方便化土の仏でなくて、善悪、智愚、男女、老少をえらばず、平等一味に撰取したもう眞実の仏の大悲本願にふれたものであります。

人によつて仏を見た聖人は、今や、ついに仏によつて人を尋ねられます、そこに発見せられたのが、釈尊ならびに七高僧であります。七高僧の中、善導、法然二師のみをあげられたのであります。

「弥陀の本願……………まことにおはしまさば」

釈尊の説教虚言なるべからず。

仏説……………まことにおはしませば

善導の御釈虚言したまふべからず。

善導の御釈……………まことならば

法然のおほせそらごとならば

法然のおほせ……………まことならば

親鸞がまをすむね、またもてむなしかるべからずさふろうか。

詮ずるところ愚身の信心におきてはかくのごとし。」

### 大経会座に於ける釈尊

私は今はからずも、遠き三千年の昔、大無量寿経を説きたまいし靈鷲山上の会座における釈尊を憶念します。

常隨の弟子、尊者阿難が、釈尊の御相好を仰いで申し上げます。

「今日世尊は、諸根のどこもかも悦びに輝き、お肌も清浄に、容顔は崇高く光を放ちたまひ、澄みきつた鏡の裏と表とが透き通るようにならせられる。威容の妙にして勝れたまへることは、何とも申し上げることも出来ませぬ。私は長い間お側におつき申しておつたけれども、かような殊妙なる御相好はいまだかつて一度も拝み奉つたことがありませぬ。

世尊よ、私は思います。

今日世尊は、まれな奇瑞な御相好をあらわしていらせられる。

今日世尊は、衆魔を制し、一切諸仏を念じたもう普等三昧に入つていらせられる。

今日世尊は、人天を導いて涅槃に入らしめたもう導師の徳行を行じていらせられる。

今日世英は、くらぶべきものもなき、最もすぐれた智慧に住していられる。

今日天尊は、自利利他まどやかなる悲智円満な如来の徳を行うていらせられる。

三世諸仏はみな御説法の時は、仏と仏と相念じたもうと聞きましたが、ただ今世尊は定めし諸仏を念じていらせられるに相違ありませぬ。」

こうした阿難の驚嘆からはからずも説かれたものは、如来の本願と名号の成就でありました。一切の衆生が平等に信じて助かる浄土他力の念仏でありました。常の釈尊は、聖なる法を説きたもう大聖であります。大経の会座に於ける釈尊は、仏を念じたもう如来でありました。如来の本願を念じたもう釈尊でありました。即ち釈尊をして、希有なる聖容を示さしめたものは、久遠の如来本願に外ならなかつたのでありました。

「弥陀の本願まことにおわしませば、釈尊の説教虚言なるべからず……………」

釈尊の説教以前に、弥陀の本願こそ真実であらねばなりません。

一如も、如来も、本願も、それは時と処と人とを超えて、しかも人の上に生きます。もちろん釈尊なくして仏教はあり得ない。釈尊あつて初めて仏教は大地の教法となつたのであります。けれども今一度深く考えた時、釈尊ましまして弥陀があるので

はない。弥陀あつての釈尊である。久遠の唯一の眞実が、釈尊を生み出したのであります。

聖道諸教を説きたまいし釈尊は、久遠の法身を「我」として感じ、「我」として説きたもうのに、今日に限つては「我ならぬもの」として、如来の本願を説きたもうたのであります。

ああ、釈尊は、救主すくい主としてのみ座を転じて、衆生と共に浄土に願生ねんじやうしますもの如く、衆生の前に大善知識として、教主としてお立ちになり、唯一の眞実をさし示されるのであります。

「久遠実成阿弥陀仏 五濁の凡愚をあはれみて

釈迦牟尼仏と示してぞ 迦耶城には応現する」 (和讃)

古今楷定の大師

「仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。」

善導大師は、すぐれた批判と、深い信念に生きた方でありました。大師は、眞に觀無量寿經を味解達読なされて、如来他力の念仏に生き、そうして、玄義分、序分義、定善義、散善義等の御釈の書物を著して、如来の救済を凡夫のものとして下さつたのであります。

大師の御出世まで、淨影大師、天台大師等の聖道諸宗の方々は、釈尊の本当のみ心を握り得ないで、弥陀のお救いも、下品下生の凡夫がおめあてではなくて、上品上生4の聖者こそ、如来の浄土へ生れて行けるように説かれたのであります。したがつて七重の牢獄の中で大地の上に愚かにも泣いて救われた王后韋提希夫人も、それは決して凡夫ではなくて、求道過程において凡夫の相こそとつておれ、実は権化の聖者である。だからその得られた無生法忍のさとりも、凡夫には手の届かない解行以上の悟りであるとせられたのであります。

しかるに大師は、觀經の「如是凡夫心想羸劣るいれつ」の言葉を生かして、韋提希夫人を聖者として見ず、単なる凡夫、しかも心想こころづかひの弱く劣れる女性としてお考えになりました。阿弥陀如来の救いは、決して聖者や善人が本意ではない。苦惱の群生海を哀愁したもう大慈は、罪悪生死の凡夫こそ、出離の縁なき悪人こそ、正客として喚びたもうことを、はつきりと明されたのであります。まことにそれは宗教価値の純なる発展であり、創造でなくてはなりません。

天親菩薩や、曇鸞大師の觀念の宗教が決してまちがいではありません。かの深遠なる浄土の論なくしては大無量寿經は解けないであります。けれども大地には、智もなく、行もない、哀れな悪人女人が救いを求めています。この一切群生の心に同じて、深い宗教的要請を満たしてくる先達がなくてはなりません。

善導大師のみ教えは、如何なる悪人でもお念仏一つによって救われる……という、地上最後の一人をも残されることのない、大道の闡明でありました。

人間のはからいが、聖なる涅槃ねはんを創造するのではない。久遠に円満成就されたる南無阿弥陀仏が、その本願自然の妙用はたらきによつて、衆生貪愛、瞋憎の水火二河の間に、能

く清浄願往生心を生ぜしめ、五逆も謗法も、廻心懺悔すれば、みな浄土に往生せしめるのであります。

まことに、ただ一心専念に、時と処とをきらわず、彼の仏願に乗じて、お名号を信じて称えることによつて救われるという、大師のみ教えがなかつたならば、救いが人間のものとはなりません。かく考える時、大師の偉れたる功德と功績を、聖人と共に「善導独明仏正意」とたたえずにはいられませぬ。

しかしここに注意しなくてはならぬことがあります。如何に大師によつて念仏が大地のものになつたからとて、大師の偉大によつて如来が成立つのではないということでもあります。弥陀の本願まことにおわしまさばこそ、大師があるのであります。如来は絶対であり、唯一の眞実であります。大師の尊いのは、その唯一の眞実を信じ、眞実を生き、やがてそれを説いて下さつたからであります。眞理は何時も偉大なる天才によつて大地のものとなります。さはさりながら、聖なる殿堂の扉に耳を寄せて、如来の胸底の久遠の秘密に徹底して、自然の浄土の生命の本源を汲み、人間万人の救われる大道を示された大師に対して、心からなる合掌をささげずにはいられませぬ。

### 法然上人と時代

「善導のおほせまことならば、法然のおほせそらごとならんや」

法然上人は「偏に善導一師による」とまで言われたほど忠実に大師をつがれた方でもあります。それは上人が大師の著書によつて如来本願の救いを体得された方だからであります。

いつたい法然上人以前にも、日本には念仏はありました。けれどもそれは聖道の実践的な行の一つにすぎなかつたのであります。独立せる一宗として旗色鮮明に浄土教を樹てられたのは法然上人であります。されば上人の代表的な著述である所の「撰本願念仏集」の巻頭には、

「往生之業 念仏為本」

と聖道の諸善雑行に対して、専修念仏の大施<sup>ほい</sup>をおしたてて、浄土門の大成を明かにしていられます。法然上人の化導によつて眞実の生命を受け継がれた親鸞聖人は

「本師源空世にいでて 弘願の一乗ひろめつゝ、

日本一州ことごとく 浄土の機縁あらわれぬ」

「智慧光のちからより 本師源空あらはれて

浄土眞宗をひらきつゝ、 選択本願のべたまふ」(和讃)

と聖人は讃嘆せられました。

けれども、果して時代は眞実を眞実として受けたでありましようか。五濁悪世に相應した、人間の救われてゆく道は念仏たつた一つである。聖道門を闔<sup>かち</sup>いて浄土門に入れ、雑行<sup>なげつ</sup>を抛<sup>なげ</sup>て、正行に帰し、助業<sup>かたわら</sup>を傍<sup>かたわら</sup>にして、選んで正定業を専らにする。正定の業とは、南無阿弥陀仏のみ名を称ふることである。仏の本願に依るのであるから必ず往生することが出来ると、この純一なる宗教の宣揚が、易々と世に受け入れられた

でありましようか。悲しくもこの卓絶したる真実は、もろくも蹂躪ふみにじられてしまったのであります。

腐敗しきつた叡山、聖道の仮面にかくれて、生命の枯涸ここした、権勢と栄達と闘争にのみ、悪僧ぶりを発揮していた叡山の大家が、迫害攻撃の刃を向けたのはもちろんであります。

けれども更に、当時真面目に仏教の真髓を發揮して、世を積尊在世の古にかえそうとした高僧にまで批難の矢をひかれたのであります。梅尾とがのおの明慧上人と、笠置の解脱上人とがそれであります。

明慧上人「ここに近代、上人あり、一卷の書を作り、名づけて選択本願念仏集という。経論に迷惑して、諸人を欺狂し、往生の行を以つて宗とすといえども、反つて往生の行を妨碍せり。」

と言ひ、十六ヶ条の過失ありとて、主として菩提心をもつて往生極樂の行とせざることをあげて、火のような、血涙をしぼつての攻撃の書は發表せられました。さらに南都の解脱上人は、主として教化の方面より、厳しい弾劾の矢を向けて来ます。

真実を真実として受け取るには、すぐれた眼が必要であります。その時代の大部分が真実だと承認する教えならまだしも、それが社会的に疑われ、あるいは批難攻撃の中に蹂躪せられて、真実として容認されない試練の日に、血まみれになつても、生命をかけても、真実を受けついでゆくことは、すぐれた智慧と、真理に忠実な大勇の持ち主でなくては出来ぬことであります。

法然上人の上に純化せられた本願の念仏は、まじりものなく親鸞聖人によつて受けつがれました。そして親鸞聖人によつて著述せられた『教行信証』は、社会的に葬り去られようとするたつた一つの真実を、真実として發揮せんがためのものであります。同じ法然上人門下の人たちのうちにも、様々に考え誤つた人たちがありました。内と外とに対する顕真実の聖教が『教行信証一部六卷』でありました。それは、偉大なる宗教文化の骨格であると共に、聖人の血と涙とによつて綴られた体験の告白であります。

「法然のおほせそらぐとならんや……………」

とは決して法然上人のお言葉をのみ認容されたのではない。ただ単に人格の輝きに目がくれたのではない。法然上人の導きによつて、ついに体解せられた南無阿弥陀仏の六字の大信により、この久遠唯一の真実から更に逆に、弥陀本願の生命の流れをたどつて、そこに積尊を發見し、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、法然と一河の流れに、まことに生きるまことの人を發見せられたのであります。であるから、その一宗を開始せられたことでも、決して法然上人の技巧とは見られないで

「智慧光のちからより 本師源空あらはれて

浄土真宗ひらきつゝ 選択本願のべたまふ」

と讃嘆せられたのであります。

かくて法然上人は親鸞聖人にとって絶対に無視することの出来ない人格でありましたが、しかし、それは単なる人間の愛の感情からではなく、徹頭徹尾、如来あつて

の法然上人であります。久遠の眞実を生き、永劫の眞実を告げたもうが故の眞人格であります。

### 信の權威

教えに向かつては従順な求道者でなくてはなりません。しかし信の世界は独立であり、金剛であります。

「法然のおほせまことならば、親鸞がまをすむね、またもてむなしかるべからずさふらふか。」

ここに聖人は、はじめで、御自身の信の眞実であることを主張せられました。何物をも持たない従順は無生命であります。

いかなる教化をも受け入れない堅信は我執であります。

凡夫の、悪質な我執を信念とあやまる所にも、無生命の盲信や従順を信念とまちがえた所にも、眞実の生活はありません。

聖人は、今や權威者の如く、関東の同行に向かつて、何ものにもはばからず、自らの信の眞実を主張せられました。

それは決して愚禿の私の主張ではなくて、徹頭徹尾如来の本願の高調であり、宣揚であります。これなくしては眞人格の生活のあり得ない、根本生命の是認であります。

我らは今や、聖人によつて、考うべき多くのものを恵まれた。

崇き生命道について多くのものを知らされた。

乾からびた概念を弄ぶことではない。

光なき人間の本能の単なる肯定や、迷妄深き人間の感情の陶醉ではない。

相対的な善悪や、外面的な美醜に囚われて、徒らな計らいにやつれることでもない。

ただ、普遍の眞理、永遠の眞実たる如来に覚めることである。帰命することである。

絶対なる如来をその源とする赤き生命の血潮が、生きた人格から人格の上を貫流して、無限に浄化してゆく。

この普遍の生命なくして、何らの人格ぞや。

絶対の謙虚は愚禿の眞面目である。

されど、金剛不壞の信樂は愚禿の生命である。

藍より出でて、藍より青し。

師教に忠実である者のみ、やがて、師教より独立して、我を眞に生かすと共に、師教をもまたまことに生かす。

人を慕わざる者、人に慕われず、  
人を信ぜざる者、人に信ぜられず、  
人を尊敬せざる者、人に尊敬せられず。

師を冒瀆ぼうとくし、師を侮辱し、師に反逆する者は多い。

師を真似まねすることもなお易い。

されど聖人の如く、真に師を生かしつつ、自らを創造することは至難のことである。

それが単なる口先きの技巧である。

それがただ頭の中の遊戯である。

それに何の権威と迫力があろう。

内部生命の必然的な願いによつて、身をもつて体験せられたものだけが、人類の燈炬となる。

宗教は生きた事実である。

自らの上に金剛不壊の力を感じ、一如絶対の価値を認識し、徹底せる安心と不滅のよろこびを自証するが故に、生活必然の事実である。

自証なき信に絶対自由の境地あることなし。

独立創造不退の歓喜あることなし。